



Title	めざす社会からすごす社会へ : 「弱さの思想」をめ ぐって
Author(s)	宮前, 良平
Citation	未来共生学. 2015, 2, p. 338-342
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51793
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

めざす社会からすごす社会へ

「弱さの思想」をめぐって

宮前 良平

大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

弱さについて考えてみたい。それは、たとえば、弱さの力であるとか弱さの強さといったたぐいのものである。その手がかりとして、私の経験を少し述べたい。なんてことはない経験だが、今でも心に残っている経験である。

私は毎年、9月の中旬に金剛コロニーという辺鄙な山の中にある障害者福祉施設で一週間ほど住み込みでボランティアをしていた。その日、私は50代くらいの男性の方とペアになり、一緒に散歩をしたりご飯を食べたりした。その方の障害は重く、私がいくら呼びかけても全く反応せず遠くの方を見ているばかりであった。それでも辛抱強く「出身はどちらですか?」「ご家族は?」「好きな食べ物は?」などと話しかけてみるのだが、聞こえているのかどうかも疑わしいくらいに無視されてしまう。そのうち、話しかけるのにも疲れて、ただ隣でぼけっと座っているだけになった。ただ隣にいるだけというのも、それはそれで気まずくなって、手を握ってみた。すると、かすかに手を握り返してくれたような気がした。錯覚でなかったことを確かめるために、手を握りながら先ほどの質問をすると、答えはくれないが、弱い力で手を握り返してくれた。障害が重くて簡単なコミュニケーションすらできないのかと諦めかけていたので、そんな些細なことがたまらなく嬉しかった。「弱い」からこそ伝わってくるものが、そのとき確かにあった。

もう一つ心に残っている経験がある。私は豊中のある小学校のとおる特別支援学級のOB・OGさんたちと毎月一回、交流をしている。その日は、映画を見に行き、おいしいランチでも食べようということになった。メンバーの中に全盲の女性がいる。彼女は目が見えないため映画の内容を十分に理解することができず、しまいには眠り始めてしまった¹。映画館を出て、彼女に感想を聞くと「楽しかった」と答えてくれた。気を利かせてくれたんだなと思っていると「映画の内容はよく分からなかったけど、みんなと一緒に映画に来て楽しかった」と教えてくれた。映画を見るという目的を達成できたかどうかではなく、みんなと一緒にただ「すごす」ということの方が彼女にとってよっぽど価値のあることだったのだと気づかされた。

弱いからこそ伝わってくるものがある。そして、何をするでもなくただ一緒にいるだけで満足することがある。こういったことは何度も経験してはいる。しかし、経験するだけで終わってしまう。大切なものをことばにすることは難しい。一人ではできないから『弱さの思想 たそがれを抱きしめる』(高橋・辻 2014)を片手に「弱さ」をめぐる思想について、少し述べてみることにする。

まず、弱さとはどのような性質のことを言うのだろうか。負けたから弱いであるとか、劣っているから弱いという言い方もできるかもしれない。しかし、このような物言いは、正確ではない。負けたことや劣っていることがすなわち弱いとはならない。「弱い」から負けることは、ある。しかし、「負け」は「弱さ」の証明にはならない。

そこで、弱さを「有限性」つまり、「制約」と言い換えてみる(高橋・辻 2014)。たとえば、経済学者であるE. F. シューマッハーが提唱したことばに「スモール・イズ・ビューティフル」というものがある。「スモール・イズ・ビューティフル」とは、すべての生き物が「どこで成長を止めるかを心得ている」ことを表したことばである。私たちは、生まれたときから有限で制約を抱えた存在である。寿命はその最たるものだろう。そして、「弱者」とはその中でも特に制約のきつい人のことを指しているに過ぎないのかもしれない。

「制約＝弱さ」を取り除くことは、よいことだろうか。よいとも言えるし、よくないとも言えるだろう。よいと言う人は、競争主義や功利主義の原理を持ち出すかもしれない。競争で勝つためには、「制約＝弱さ」はできる限り取り除いたほうがいい。そして、あらゆるものが制御可能な状態に置かれていると都合がいい。未来先取りの前傾姿勢になっている社会(鷲田 2006)において、「制約＝弱さ」を取り除くという制御は、正当化される。

その一方でそれをよくないと思う人もいるだろう。私もその一人である。しかし、うまいことばが見当たらない。もう一度『弱さの思想 たそがれを抱きしめる』に戻ってみる。

本書では弱さがあるからこそその価値が示されている。たとえば、イギリスのリーズにある子ども専門ホスピスにおいて、死は子どもと親の残された時間を輝かせてくれるものであり、「逆説的な特別な時間を与えてくれるギフト」(高橋・辻 2014: 164)とポジティブに捉え返される。本来であればネガティブに捉えられる死という「制約＝弱さ」をポジティブなものとして抱きしめることが「弱さの思想」であると言える。つまり、「弱さの思想」とは、「敗北力」であり、「敗北力」とは、「敗北とされるものが敗北じゃないということ」(高橋・辻 2014: 164)と言うことができる。

また、弱さは強いつながりを生む。北海道浦河町にある浦河べてるの家という精神障害者のグループでは、弱さの自己開示が積極的に行われる。精神障害を抱える彼らは、今まで精神障害という弱さを薬で押さえつけなくてはいけなかった。しかし、べてるの家では、自身の症状を積極的に開示する。すると、同じような症状を持つ人と今まで以上に強い結びつきができる。「弱さを絆に」(浦河べてるの家 2002)というモットーがこの状況をよく表している。これが逆に「強さを絆に」だとしたら、うまくいくだろうか。

鷲田(2006)の言うような前傾姿勢の現代社会を、ある目標へと向かう「めざす」かわりが求められる社会²であると言うことができるだろう。「めざす」ことが求められる社会は、私たち一人ひとりの「内

容」が問われる。そういった社会において、人よりも生産能力の高い人や珍しい技能・資格を持っている人は、人よりも生かしておく価値のある人とみなされる。しかし、そういう社会で「内容」が乏しいとみなされている人たちは必然的に生きづらさを抱えることになる(立岩 2013)。あらゆる制約によって、「めざす社会」から疎外されているという現実がある。

誰しもを疎外しない共生社会は、そういった「めざす」社会の単純な否定ではない。「めざす」ことの論理や倫理、価値を認めただけで、それでもそれだと困る人もいるということをおぼろげに忘れないようにしなければならない。つまり、その人の「内容」に関わらずその存在を認め、「めざす」ことが求められなければならない。そして、「めざす」ことにおいて弱さは、たちまち価値を帯びる。手を握り返すだけというコミュニケーションの価値や、たとえ見ることができなくても一緒に映画館に行くことの価値は、ここにある。「めざす」社会において取り除かれるべきものであった「弱さ」は、「めざす」社会においてはその時間を輝かせてくれるものへと変貌するのである³。

強さがあること、強さの良さがあることを否定しない。しかし、強さの良さといったことが、弱さの悪さにつながってしまうのなら、それは悲惨なことだと言いたいのだ。乗り越えられない弱さがあるとして、その弱さは邪魔だろうか。取り除くべきだろうか。ないにこしたことはないのだろうか。この問いに、明確に答えることはまだできない。しかし、どうしようもなくなって握ったあの子の手を、私はいまだに忘れられずにいる。

注

- 1 余談だが、その映画は非常につまらなくて、私もほとんど寝てしまっていた。
- 2 競争主義や、功利主義、新優生主義、業績主義もこの中に入るだろう。新優生主義とは、QOL (Quality of Life) を高めるために身体や知能を制御することを肯定する主張のことである。たとえば、健康に過ごすために手術によって胃を小さくし、太らないようにするという事例がアメリカではすでに珍しいものではなくなってい

る(児玉 2011)。

- 3 肥後 (2000)は、障害児教育の見地から、「すぐす」かかわりから「めざす」かかわりへの移行を主張した。「めざす」かかわりとは、できないをできるに変えることに主眼を置いたかかわり方であり、「すぐす」かかわりとは、できないからできるに至るまでに経験するさまざまなムダやアソビを大切に、一緒に〇〇することに主眼を置いたかかわり方である。本論では肥後 (2000)の議論の範囲を二者関係から社会へと広げているが、言いたいことはそう変わらない。

参考文献

浦河べてるの家

- 2002 『べてるの家の「非」援助論—そのままがいいと思えるための25章』東京:医学書院。

児玉真美

- 2011 『アシュリー事件—メディカル・コントロールと新・優生思想の時代』東京:生活書院。

高橋源一郎・辻信一

- 2014 『弱さの思想—たそがれを抱きしめる』東京:大月書店。

立岩真也

- 2013 『私的所有論第2版』東京:生活書院。

肥後功一

- 2000 「コミュニケーション障害を生み出す見方」大石益男編『改訂版コミュニケーション障害の心理』pp.19-38、東京:同成社。

鷺田清一

- 2006 『「待つ」ということ』東京:角川学芸出版。

エッセイ

祈りからみる共生社会

大場 麻代

大阪大学未来戦略機構第五部門特任助教

私がケニアとかかわりを持つようになったきっかけは、青年海外協力隊で理数科教師として地方の中等学校(日本の中学校3年生から高校3年生の年齢に相当)に派遣された時からである。以来、ケニアと日本を行き来し、今は年1~2回の頻度で訪問している。

そのケニアは多民族国家で、人口のおよそ8割がキリスト教徒、1割がイスラーム教徒、そしてその他ヒンズー教徒などからなる。宗教は主に諸外国の人びとによりもたらされてきた。中でもキリスト教は、宣教師が東アフリカで布教を始めた19世紀末頃から主な広がりを見せている。ちょうどその頃、アフリカ大陸は次々と西欧諸国による植民地支配下におかれていくのだが、ケニアは、ケニア西部に位置するビクトリア湖(白ナイル川の源流)の資源と領土をめぐる西欧の争いに巻き込まれるかたちで、イギリスの植民地下に敷かれていく。イギリスはビクトリア湖を自国の領土にするため、アクセスのルートを確保する手段としてケニアを保護領とし、ケニア東部の海岸に位置するモンバサからケニアを横断し隣国ウガンダに至るまでウガンダ鉄道を敷設していった。これにあたり、大勢の現地労働者が雇用されたのであるが、イギリス人との間で言葉によるコミュニケーションの問題が生じたとされる。そこで、植民地政府は宣教師の布教活動を許可する一方、教会を学校として英語教育にも力を入れていった。かくしてキリスト教信者が増加していったのである